

中学生広島平和教育研修



8月5日から7日まで、富士見中学2年生5名が町の代表として広島市を訪問しました。

平和記念式典への参列や平和記念資料館見学、被爆された方のお話しなどから、戦争の悲惨さや平和の尊さを学びました。参加者5名がこの研修を通して感じた平和への思いや決意を、今月から数回に分けて紹介します。

私が見て感じた広島



富士見中学校2年
とみ山 みそら

「本当にこの場所にあの核兵器が落ちたのか？」そう疑ってしまうほど、広島は活気があつて様々なものであふれていました。しかし、にぎやかな大通りを抜けて平和記念公園へ向かうとその疑いは消え、確かにここに原爆は落ちたのだと確信しました。

平和記念式典での広島市長の平和宣言や子ども代表の平和への誓いは、広島に生きる人々の平和への思いが切実に伝わってきました。そしてその平和宣言で核兵器禁止条約に百二十二か国が賛同したということを知り、「核兵器のない世界」に向けて、一歩ずつ近づいていることを実感することができました。

私たちに証言してくれた木村巖さんは、「原爆や戦争への恨みよりも自分で立ち上がらなくてはという思いが強かった」と語ってくれました。また、「あんな時代は二度とあつてほしくない」ともおっしゃっていました。戦闘機が頭上を飛び交い食糧は入手しにくく、国のた

めに中学生でも働かなくてはいけない時代。一つの戦争、原爆がこんな時代を作ってしまうことに強い怒りと深い悲しみを覚えました。

その怒りと悲しみがさらに強く深いものになったのは平和記念資料館を見学したときでした。ボロボロの服や弁当箱などの遺品は犠牲者の方が「つらい、苦しい、死にたくなかった」と訴えているようで胸が苦しくなり、二度と戦争を起さしたり核兵器を使ったりしてはいけないと強く思いました。

今回私は広島を訪問し、戦争や原爆がどれだけの人の人生や平和や未来を奪ったのかを学んで今を大切に過ごしたい、そしてこの事実を一人でも多くの人に伝えたいと思いました。また広島には外国の方も大勢いて国際的に広島や原爆への関心が高まっているのを感じられました。この訪問で学んだこと、感じたことを無駄にせず世界平和実現のため自分ができることを考え実行します。



僕が考える平和



富士見中学校2年
こう神 けい 恵

今から七十二年前の昭和二十年八月六日、その日の広島は空は真つ青な空、とても天気の良い朝だった。上空では着々と地獄の舞台が準備されていると知らず広島市の一日の活動が始まった・・・いつものように。そして、その時は来た。午前八時十五分。エノラ・ゲイ号によって『リトルボーイ』と名の付けられた原子爆弾は落とされた。この、たった一発の原子爆弾によって、広島は街は一瞬にして焼け野原となった。爆風により家は壊れ、人々はその下敷きになつて燃え、また別の人々はガラスの破片がつきささつていた。周りには、火傷して皮膚が垂れ下がった裸同然の人が水を求めさまよつていた。

僕は広島を訪問して、このような惨事を知り、もう二度と起こしてはいけないことだと痛感しました。今の日本が平和であるのは戦争をしていないからだと思います。そしてそれは実際に戦争を体験された方たちが悲惨さを訴え続けた努力があつて

のことです。被爆者の高齢化に伴い原爆のことを知らない人が増えていくことは、平和を考える上で緊急の課題の一つです。日本だけでなく世界が平和になるためには私たち若い世代が伝えなくてはなりません。私たちには伝える義務があります。そして唯一の被爆国に住む私たち日本人が伝えることは使命であると思えます。その使命を全うするために、七十二年間かけて築き上げてきたものを受け継ぎ、日本が唯一の被爆国であるという自覚を持ち、戦争について学ぶことが大切だと思えます。

今もなお原爆による被害に不安を抱き続けながら生きている人がいます。そしてこの世界には、一万を超える核があります。世界には平和ではない人がいます。平和ではない国があります。私たちの力がたとえ微々たるものでも戦争について知ることができると思えます。原爆について知ることにはできると思えます。もしそうしなければあの日の出来事を繰り返してしまうことになってしまいます。「世界平和」を実現することもできません。

広島研修をきっかけに、今後とも原爆、戦争について考えていきたいと思えます。